

に横たはれる小兒の上に蓋ひかぶさつた。

彼の女は小兒を縊め殺した。……………

そして彼女は地臺に荒く横たはつて、今や眠ることのできる、やうになつた、其の喜悅よろこびで静かに微笑はくわむだ。一分も経たないで、眠れる人の静かな聲が聞え出した。

彼の女は、深い、深い、夢もなき、死したるが如き眠に陥つた。……………(完) (明治四十四年二月十八日)

附言、予輩の文藝に對する、熱烈なる感情は恒に己の愚を顧みるを許さぬ。唯是の稿の如きは和田兄の斧正の勞に依て、多少予輩の非才を蓋へるものあるを見る。改めて同兄に謝する所以である。

運命

在京都大學生 島田花柴

運命は、君が憎める其の人と、君と我とを三つあひに纏る。

雨ざはり、出ぬ日曜は君と踏む、花の乱れを、繪に画いて居ぬ。

みづは女も我に泣くかや温かう、霧きてつとむ湖ぞひの道。

日は彼方、海に入るなり藁ひさし、古驛四五戸を斜に照りて。

濱風は葦の枯葉に、もつれつゝ、路を迷うて唯泣いて居り。

鉛色の日影は迷ふ雪の野を、二つに割す水黒き川。

短歌

さびし

北里江村

熱少しある夜は白くまつられる敷布もさびし涙拭へる、

暮れの海濤浴びて立つ巖角の冬の微光を鳴く千鳥かな、

自らをさびすむ時にいさゝかの力見ゆるがひたに悲しき、

染屋裏片畑道の藍溝に冬の薄日の消ね去りしあと、

名と富に酔わる巷の人ごみに酒に酔ふ子はさいなまれをり、

黒犬は鈍ぶ灯す泥ににた／＼と物喰ふ辻の冬の宵かな、

いさゝかの震ひ傳ふるペン先に最終のごと日記つくるも、

波の音に二人稚なくありし日のそれより荒びぬ我が命かな、

魂消わし巨人のやうにも闇に立つ我が家を出でよ何處へか行く、

奢りたる人を見る時その人のなきあとのごと淋しかりけり、

春の夜は薄明る程さびしかり眠りたらわぬ酔ひざめのごと、

わづかなる望みは捨てむそれ故に世の常人の如くせわしき、

圖書室の窓に漂ふ夕暮の鈍き光りはさびしかりけれ、

言はむとし更に灯を見て眩しげに言はぬはかなき君なりしかな

島の夜は濤に瞬く灯火に千鳥鳴き寄り淡雪の降る

海　　の　　嘆

二人して立つ冬の宵よひいたいげに海の嘆なげきをほのかにきくぬ

しみぐと赤き唇くちして言ふ事に夢なら夢下よ御座いますを

君と言ふ君を抱いて男てふものゝ力を始めて知りぬ

其の夕レブラ病みける人の歌に此の世のさきに又の世ありと

大阿蘇を南に動く赤馬が日向の雲に悠然として入る

君はた半われは長ながきによもすがらをほつもごりをぎだ軟かに弾く

○ 其の友はすこしあからみ風をすひて裏九州を歌はんと言ふ
かふる日のかふる夕のをもひでを目をほそうして画くたのしみ

○ 秋の夜むじのねをきゝて

月かけは雲にかくれて草むらにひとりすみゆく虫のこゑかな

○ 同じ夜によめる

雲心なしとは誰かいひにけむ物思ふ秋の月かくしゆく

○ 霰

霰ふる音さやかなりたかむらの竹の葉末にとひちかひつゝ

○ 花雨になやむ

露たにもくるしけなるを秋萩のいかなれとか時雨ふるらむ

○ 春立つ日よめる

春風のふきたつ日より九千部山くせぶかつきわそむる峯の白ゆき

○ 花の宴に二首よめる

春の日はまだ影高し花もよしどころもよろしいさのめや君

くみかはすひさこの酒にうちゑひて月を枕の花の下ふし

○花心あり

いつしかと待ちてし花は我さこの今日のまつりにほころひにけり

○人の六十一賀しけるによみてつかはしける

みどり子に立かへる今日をかきりなき君かよはひの初春にせむ

○その人のよみてかへせる

事もなくむそちの坂をこわつるもひらけゆく世の道なればこそ

○人の親の心をよめる

秋果つるもみちならねど世の中にもろきは親の心なりけり――

小詩社 咏草

影の 人

伽羅場ゆけば更に想ひぬ中程のことを悪むといひにし人を。

夕闇に牡蠣のはしらを残り行く引き潮のごと君我を去る。

濱に坐し君と濤見る我が頬に日午の風ふき君の髪ふる。

文苑

たからかにとりかちと呼ぶ船人の肩のあたりの肉こよるよき。
さりなげに女をいひて童貞の苦を秘む君のいたまじきかな。
はれがましキスする音の高きかな孔雀に似たる君にしあれば。

逝

若やかに筑紫女の眞似をする南蠻振の物好ものこのみかな。
今はさあれあひて見む日の懔はかなさはかに想ひいたりて手の文を焼く。
うたゝ悲し酒召さす夢に生くなる騎樂の子はその清に泣く。
荒れ狂ふ火口に隣る舊火口吐息かすかすうち咽ぶかな。
明くるまを空に徐くちう觸け夜にいりて岸邊に誇る大海の歌。
しかずかにもものご想はぬ君にしも不安まつはる酔醒の顔。
廻廊わたるさはな響の足拍子かすかにたびゆ玻璃窓の月。

か
た
ば
み

日々思ふ櫻が下の三五郎の前髪振りに似し人もやと。
古市は燕もゆかしかたばみの紋の青簾に風薫る朝。
若き日を君夢見すや花靄に銀の響の輪に鳴る夢を。
我世今金の格子は閉されぬ花と咲く可き血は燃わながら。
君か胸砂にも似たり我注ぐ命の水の跡かたも無く。